

## 2023年12月8日18時～20時メコン地域研究会「近代タイにおける大乘仏教と『小乗仏教』報告要旨（村嶋英治）

### はじめに

拙著『南北仏教の出会い：近代タイにおける日本仏教者、1888—1945』（早稲田大学アジア太平洋研究センター、2023年11月初め刊行、B5版788頁）は、既存のタイ研究が参照したことがない資料を多数利用して、近代の日本人仏教者はタイの仏教とどのように接し、日本仏教とタイ仏教とをどのように比較してきたのかを、極力明らかにしようとしたものである。（本書は早稲田大学リポジトリでダウンロードできる。実物を希望される方は、村嶋までご連絡のこと）

同書の中から、タイの大乘仏教に関して述べた部分を取り出し、『アジア太平洋討究』47号（2023年12月刊）に「近代タイにおける大乘仏教と「小乗仏教」：タイ国王の国内大乘仏教徒処遇及び日本の大乘仏教がタイ仏教呼称に及ぼした意図せざる影響」と題して掲載した。この論文を中心として、本報告では、上座部仏教徒のタイ人は、いつどのようにして大乘仏教に接し、大乘仏教徒をどのように処遇しかののか、又自らの仏教を大乘仏教との対比で「小乗仏教」（ヒーナヤーン、またはヒンナヤーン）と自称するようになった経緯を考察する。

### 1、タイの現在の公認教（国王による庇護宗派）の5宗教

タイ憲法は国王を宗教の庇護者と規定しているが、庇護を受ける公認教は、仏教の特定宗派、イスラーム、キリスト教、ヒンドゥー教、シク教の5宗教である。

数ある仏教宗派のうち公認教は、マハーニーカーイ、タマユットの両上座部（テラワダ）の宗派及び安南宗と華宗のみである。これらの宗派は国王の庇護（宗派の幹部僧へのタイトル付与や管長等の任命、財政的支援）を受ける。

2、五世王（チュラーロンコーン王）は、大乘仏教の安南宗（アナム・ニカーイ、1878年3月17日釋真興を管長に任命）、華宗（チーン・ニカーイ、1880年9月7日續行を管長に任命）を公認した。両宗の公認の大きな契機となったのは、高位王族の葬儀において、両宗の僧侶に功德（Kong Tek）の儀式を実施させたことである（村嶋英治「近代タイにおける大乘仏教と「小乗仏教」」『アジア太平洋討究』47号、2023年、55—56頁）。

3、しかし、五世王の上座部仏教僧侶（プラ）と大乘仏教僧侶（プロット นักรบ) に対する扱いは正反対であった。国王はプラを拝し（「沙門不敬（不拝）王者」）、一方、プロットには国王を拝させた（同上拙稿57頁）。

国王を含む19世紀のタイ知識人は、自分たちのパーリ三蔵に依拠した信仰を「仏教、プラ

プッタサーサーナー、พระพุทธรูปศาสนา」と称し、それ以外の信仰は同じ宗教とは見なしていない（この時点ではテーラワーダ（上座部）とか小乗教という概念は未だ使用されず）。

1867年11月21日刊行、チャオプラヤー・ティパーコーラウォン外務大臣著『ナンスー・サデーノキッチャーヌキット（大小事象講義）』（Henry Alabaster が *The Modern Buddhist*, 1870, として抄訳）は、中国、日本、ベトナムは神霊を信仰する国であり仏教国とは考えていない（村嶋英治「最初のタイ留学日本人織田得能（生田得能）と近代化途上のタイ仏教」『アジア太平洋討究』41号、2021年、53頁）。

1889年2月16日タイ文字パーリ語三蔵刊行計画に関する、五世王の命令は「仏教(พระพุทธรูปศาสนา)を信仰する国々は、即ちラーオ、モーン、ビルマ、ランカー」（上記拙稿、48頁）と述べており、当時の五世王の認識では仏教信仰の範囲は上座部仏教圏に限られていた。

#### 4、五世王が大乗仏教及び仏教史に関心をもった契機

- ① 五世王は、第二回ジャワ訪問(1896年5月末から2ヵ月余)及び第三回ジャワ訪問(1901年5月半ばから2ヵ月)でボロブドゥール等の大乗仏教遺跡を訪問し、考古学専門家 Dr. Issac Groneman と交流した。ジャワから多数の大乗の仏像を持ち帰った（前述拙稿「近代タイにおける大乗仏教と「小乗仏教」」63頁）。
- ② 1900年6月に日本の仏骨奉迎団が来タイした。五世王は日本の僧侶をブラではなくプロットとして俗人扱いした（村嶋英治「稻垣満次郎と石川舜台の仏骨奉迎に因る仏教徒の団結構想」『アジア太平洋討究』43号、2022年、242—246頁）。

しかし、五世王は奉迎団が献上した、南條文雄の英訳 *A Short History of the Twelve Japanese Buddhist Sects*（『佛教十二宗綱要：一名東洋哲學及宗教概要』（編纂人 小栗栖香頂、出版人 佐野正道、発兌元 仏教書英訳出版舎、1886年12月出版）に関心を示し、熟読して仏教史への理解を深めた。

#### 5、五世王及び王族がタイ仏教を小乗仏教（ヒーナヤーン、ヒンナヤーン）と自称

五世王は、1904年2月には小乗仏教・大乗仏教の比較論を高位の王族（ナリットサラームワットティウオン親王（Prince Narisara Nuwattiwong））に送った。当時、同親王は、ピマニー遺跡が大乗仏教遺跡であることを知って、クメール支配下のタイでは大乗仏教が信仰されていたことを認識して知的興奮を覚えていた。

五世王は小乗仏教・大乗仏教の比較において、「小乗仏教」（ヒーナヤーン、ヒンナヤーン、Hinayana）は、大乗側からの貶称であるにも拘わらず、タイの仏教を「小乗仏教」という概念を用いて説明した。これは上記英文『佛教十二宗綱要：一名東洋哲學及宗教概要』が用いている Hinayana を、五世王が借用した結果であると考えられる（前述拙稿「近代タイに

における大乘仏教と「小乗仏教」(64頁)この時の、五世王の小乗大乘比較論については、のちに下記の二冊が出版されている。

『五世王親翰、小乗仏教大乘仏教比較論』(簡略版、1928年刊行)

『五世王親翰、小乗仏教大乘仏教比較論』(完全版、1966年刊行)

1891年版タイ語辞典には、ヒーナヤンやヒンナの項目はあるが「小乗仏教」(ヒーナヤン、ヒンナヤン)は見出せない。1928年版文部省版タイ語辞典には、初めて「小乗仏教」が現れる。1891年版及び1928年版の両タイ語辞典には未だテーラワダ(上座部)はなく、テーラワダの初出は1950年王立学士院版のタイ語辞典である。1950年の版以降、2011年の最新版のタイ語辞典の中では、テーラワダとヒンナヤン及びヒーナヤンは同義語として並列されている(同上50頁)。

1930年1月13日の閣議でのビルマ寺ワット・クラブの扱いを議論した際、七世王(ブラチャーティポック王)は、自国の国教(state religion)は小乗仏教(ヒンナヤン)であるとして、次のように発言している(同上50-51頁)。

พระบาทสมเด็จพระปกเกล้าเจ้าอยู่หัว รัชการที่๗ ทรง "มีพระราชดำรัสว่า เราถือกันเป็นหลักว่า บุคคลย่อมมีเสรีภาพในอันที่จะเลือกถือและที่จะประกอบการในทางศาสนาตามใจสมัคร แต่ทว่าสำหรับพระพุทธศาสนานั้นเป็น State Religion ซึ่งรัฐบาลคุ้มครองและมีอำนาจครอบงำ ฉะนั้นผู้ใดที่เป็นพุทธศาสนิกจะทำการอันใดให้ State Religion นั้นเสื่อมลงหาควรไม่ พระที่ถือลัทธิหินยาน ปฏิบัติผิดไปจากหลักของลัทธิ นั้นควรถือว่าบุคคลไม่พึงปรารถนา เพราะ moral ไม่ดี"(ตัดจากรายงานเสนาบดีสภาที่๓๒/๒๔๗๒ วันจันทร์ที่๑๓ มกราคม พ.ศ.๒๔๗๒) (ที่มา; หอจดหมายเหตุแห่งชาติ กต๑/๒๓ หน้า๓๑๙- ๓๒๐)

## 6. 現代タイ仏教の中に残る大乘仏教の痕跡

ルアン・ポリバーンブリーバンは、1940年の「タイの仏教」講演で15世紀頃までタイ地域で信仰された大乘仏教の痕跡が依然今日のタイ仏教の中に残っていることを次のように述べている(同上68頁)。この講演でもタイの仏教を「小乗仏教」と表現していることが注目される。

วิธีอุปสมบทซึ่งใช้มาแต่ก่อน หรือแม้ทุกวันนี้ก็ยังใช้อยู่ในตามชนบทบ้างบางแห่งให้ผู้บรรพชารับไตรสรณคม ๒ หน คือรับเป็นภาษามคธหนึ่งแล้วรับเป็นภาษาสันสกฤตอีกหนหนึ่ง นี่แสดงให้เห็นว่าพระสงฆ์นิคายลังกาวงศ์ใช้ภาษามคธตามพวกหินยาน พระสงฆ์พวกเดิมใช้ภาษาสันสกฤตตามพวกมหายาน ซึ่งขอมนำแบบอย่างเข้ามาใช้ในประเศนี้ เพื่อให้การบรรพชาอุปสมบทบริบูรณ์ตามคติทั้ง๒นิกาย จึงให้รับไตรสรณคมเป็น ๒ จบ(หลวงบริบาลบุรีภัณฑ์ ปาฐกถาเรื่องพระพุทธศาสนาในประเทศไทย มกราคม ๒๔๘๔ หน้า๒๙)

\* 文部大臣ターニーニワット親王の『阿弥陀経』のタイ語訳(1928年)は、近代タイにおける最初の大乗仏典のタイ語訳と考えられる(同上65頁)。

\* Resolutions adopted at the first Conference of the World Fellowship of Buddhists (WFB)  
In May 1950, Colombo SriLanka

3, That in all contents the term “Hinayana” be replaced by the term “Theravada.”

\* 今日ではテーラワーダ寺院における大乘の薬師仏 (พระโคตมพุทธเจ้า, プラ・パイサットチャヤクル) 信仰が見られる。例えば、チェンマイの古刹ワット・スワンドークのウィハーンには、本尊の前に薬師仏が安置されている。